

恭仁京 FESTA 2025

恭仁宮跡現地公開事業

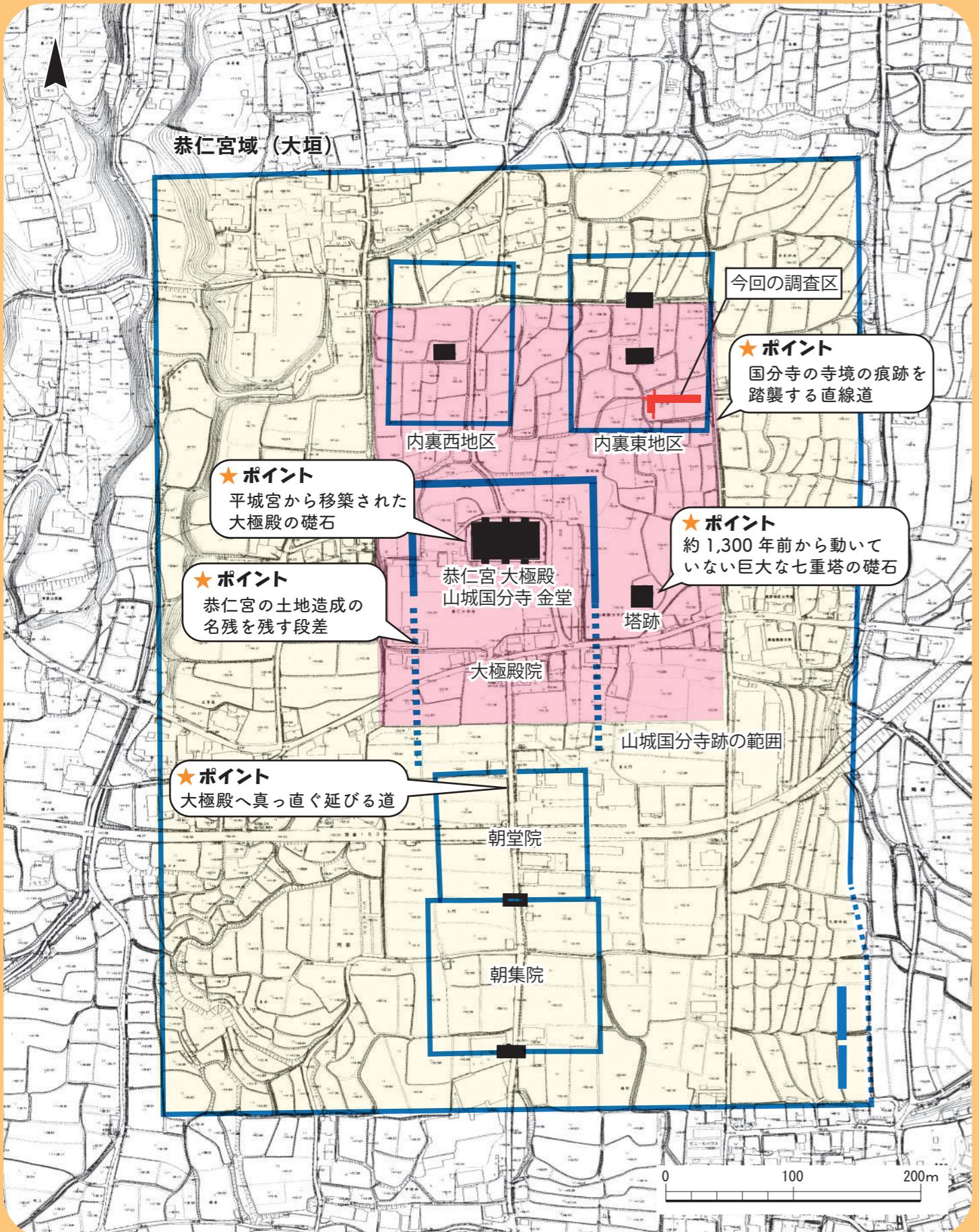


図5 恭仁宮跡全体図

京都府教育委員会

編集 京都府教育庁指導部文化財保護課

京都市上京区下立売通新町西入敷之内町／TEL (075)414-5903／URL <https://www.kyoto-be.ne.jp/bunkazai/cms/>

くにきゅうせき やましろこくぶんじあと 史跡 恭仁宮跡（山城国分寺跡） 令和7年度の発掘調査成果（第107次調査）

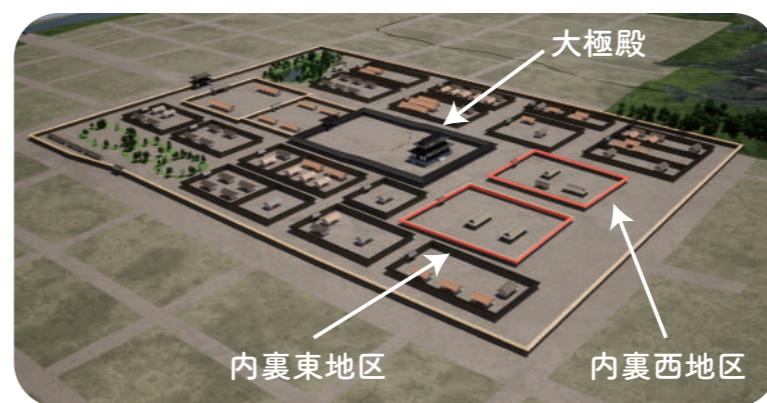
1. 恭仁宮について

みかのはら
京都府と奈良県の境に近い木津川市加茂町の瓶原地域には、現在美しい田園風景が広がっています。ここに、天平12年（740）、聖武天皇によって恭仁宮が造営され、平城京から都が遷されました。恭仁宮では「墾田永年私財法」が定められるなど、歴史上の重要な舞台となりました。現在、恭仁宮跡及び山城国分寺跡は国史跡に指定されています。昭和48年度から続く発掘調査によって、恭仁宮や山城国分寺の姿が次第にわかりつつあります。

2. 恭仁宮の範囲と特徴

恭仁宮の外郭は東西約560m、南北約750mの規模で、「大垣」と呼ばれる大規模な築地塀に囲まれていました。宮内の施設の区画も、図5（裏面）のように明らかになりつつあります。

内裏（天皇やその関係者の居住地）が2つあることが大きな特徴のひとつです。この2つの区画をそれぞれ「内裏西地区」、「内裏東地区」と呼んでいます。「内裏西地区」は、周りが全て板塀（掘立柱塀）で囲まれ、東西約98m、南北約128mの大きさです。「内裏東地区」は北側が板塀（掘立柱塀）、それ以外は、築地塀で囲まれていました。東西約109m、南北約139mの大きさで「内裏西地区」より一回りほど大きく造られていることがわかっています。



3. 恭仁宮から山城国分寺へ

天平13年（741）には、恭仁宮で「國分寺建立の詔」が発されました。都が平城京に戻ったのち、天平18年（746）に恭仁宮大極殿は山城国分寺の金堂（仏像を安置する建物）として施入されることになりました。

恭仁宮は内裏が
2つあったことが
大きな特徴なんだね！

恭仁宮イメージキャラクター
秋乃さくら



©えのきろうちょう

今回の発掘調査成果！

今回は、「内裏東地区」の東南隅付近を調査しました。「内裏東地区」では1980年の調査で、正殿（宮殿の中心建物）と後殿（正殿の背後に位置する建物）と考えられる建物跡（今回の調査区の約30m北側）が確認されたのみで、謎の多いエリアでした（図3）。

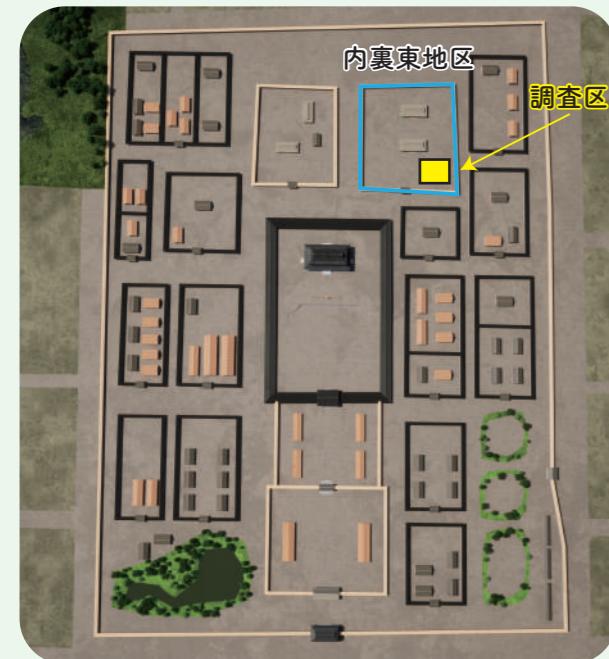


図2 恭仁宮復元CG

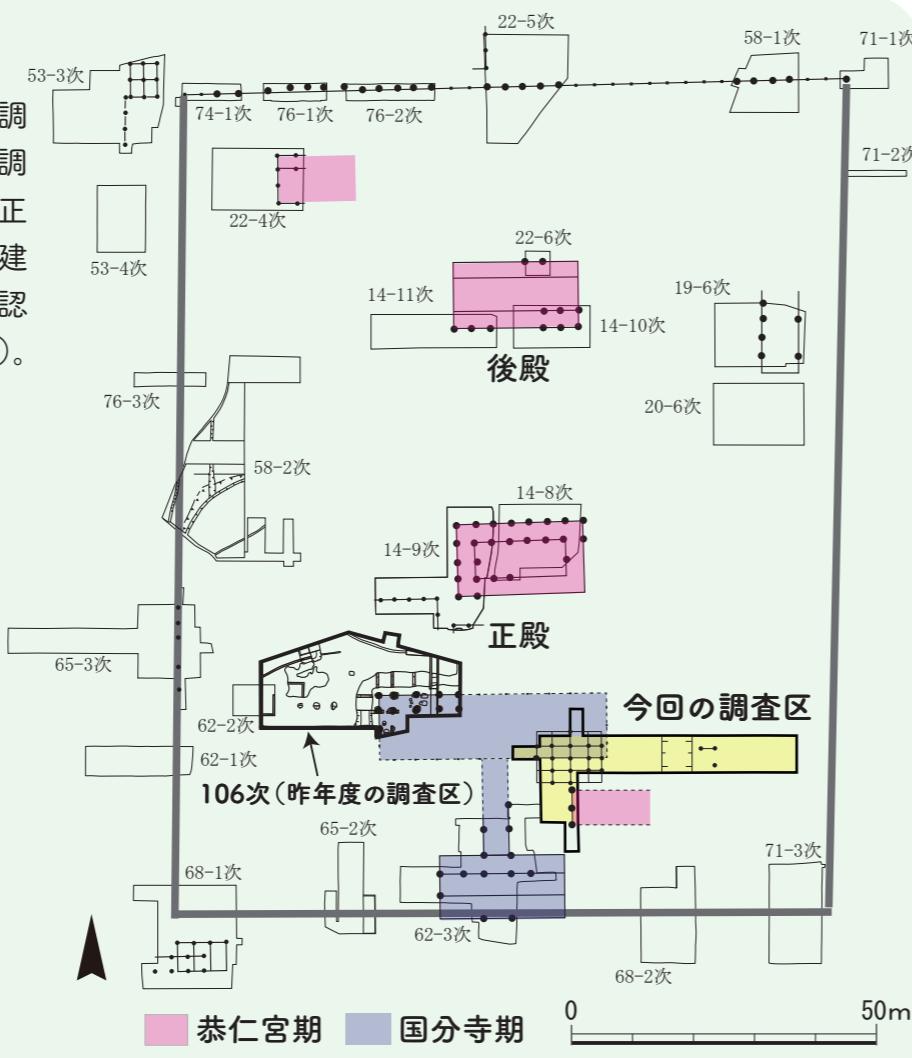
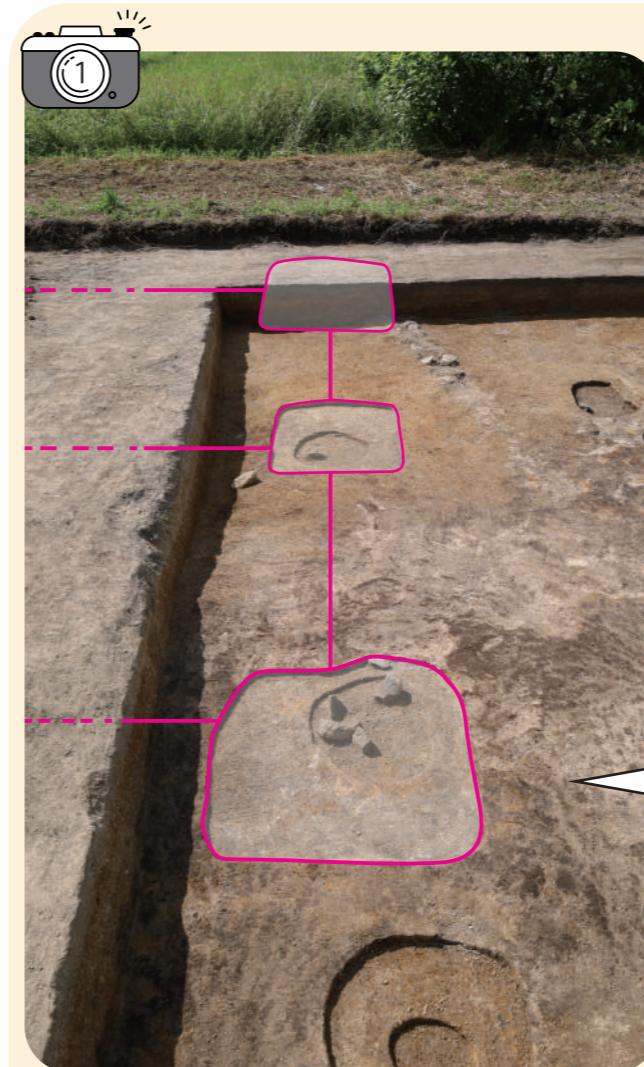


図3 内裏東地区の全体図 (S=1/1,250)



建物01検出状況（北から）

45年ぶりの恭仁宮期の建物発見！

今回の調査では、大型建物の西端とみられる柱跡がみつかりました。建物01（写真1）は、正殿と同一の方位となることから、「内裏東地区」を構成する建物の一つと考えられます。

平城宮や平安宮の内裏には「脇殿」と呼ばれる建物が存在しており、建物01も脇殿に相当する可能性があります。

脇殿は南北方向に棟を通すことが多いのですが、建物01は東西方向に棟が通る建物と推測されます。建物01の性格についてはまだ明らかではありませんが、恭仁宮の内裏の建設が進んでいたことを示す重要な発見といえます。

『続日本紀』には内裏で宴会が催された記録があります。内裏は政務や儀礼の場として多様な機能を持っていたと考えられます。

恭仁宮跡の発掘調査はこれからも続きます！今後の調査成果にも注目してくださいね！

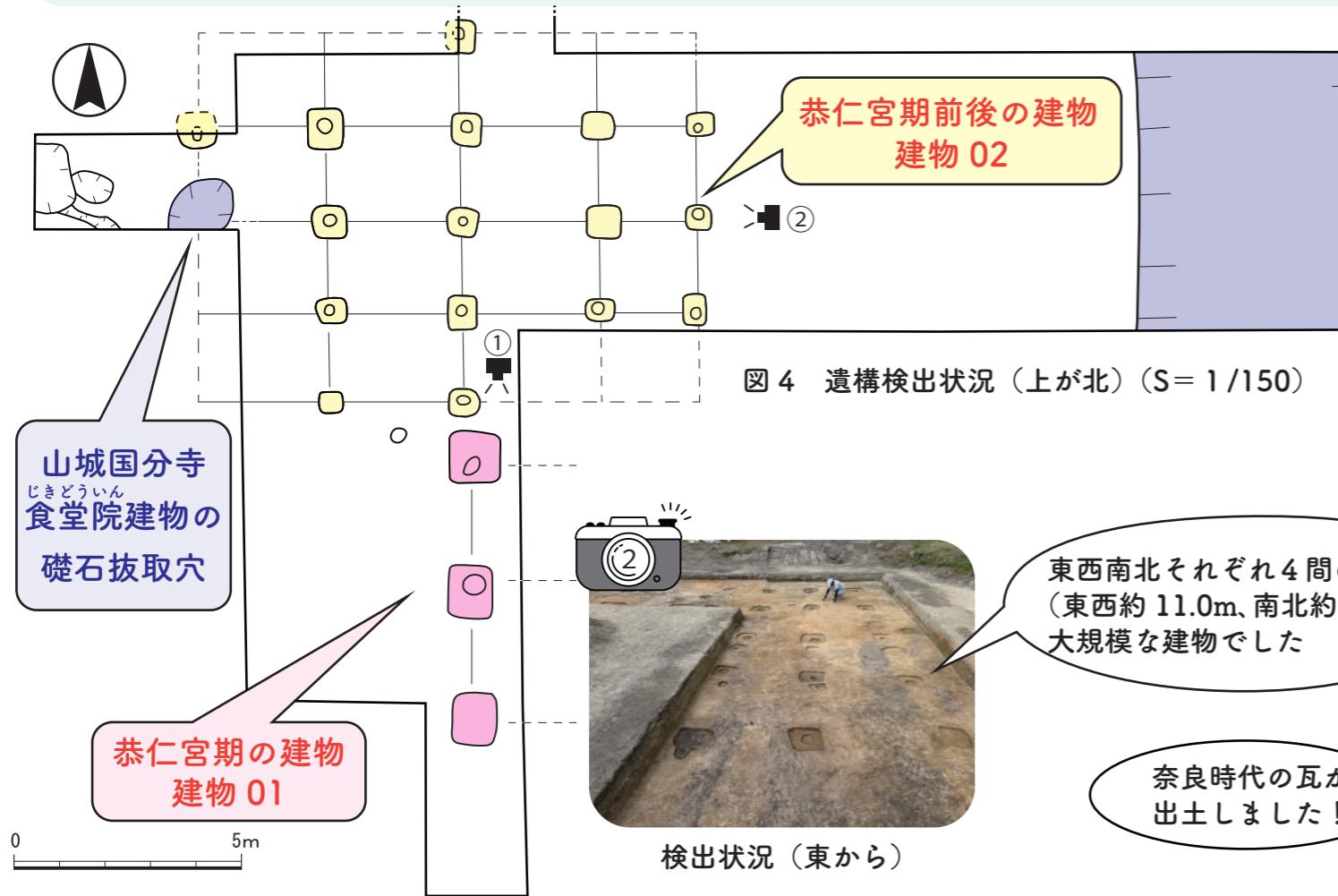
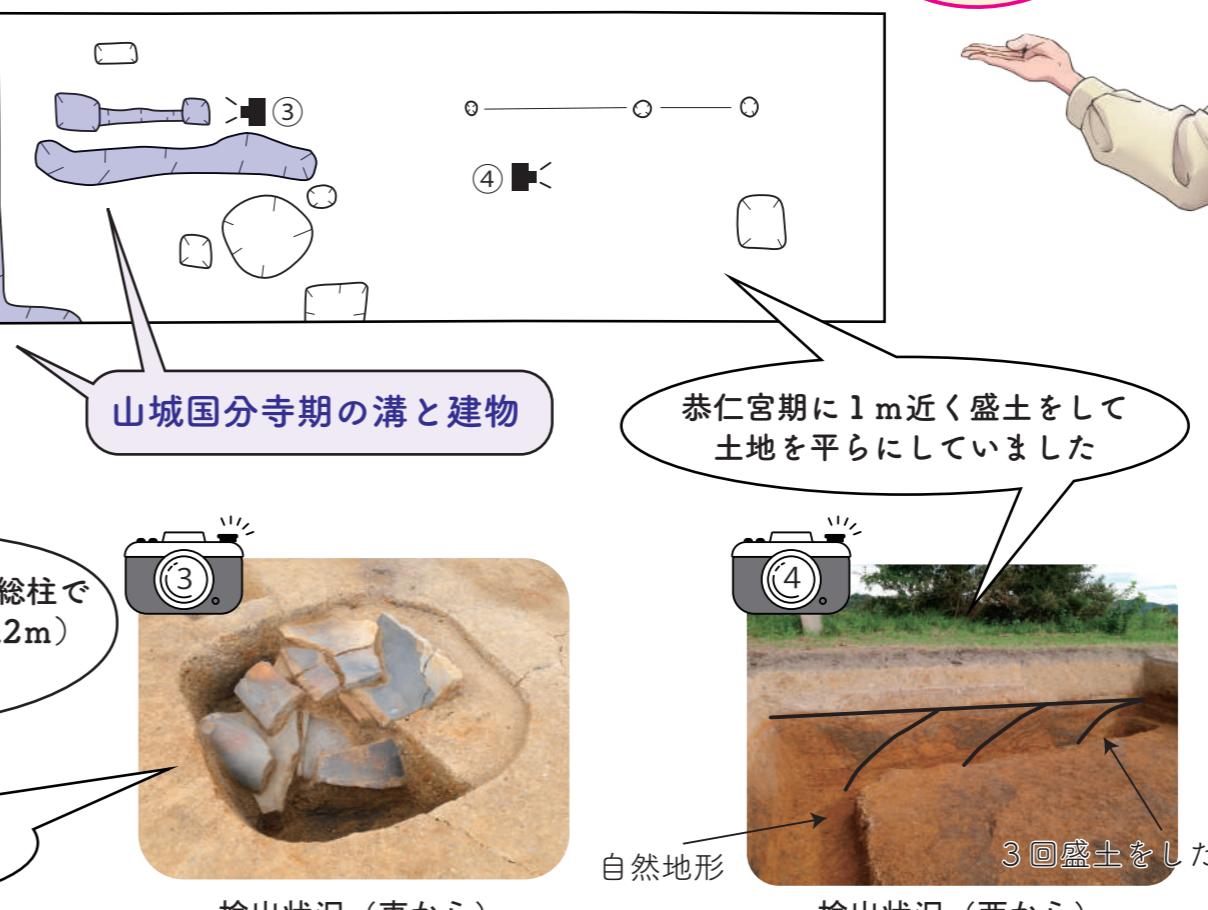


図4 遺構検出状況（上が北）(S=1/150)



検出状況（東から）

自然地形
3回盛土をした痕跡